

Title	Lewis Spence; An introduction to mythology
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.348- 349
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乘
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0348">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0348</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かくて仲間に傳へたのであるがその由來は不明である。幸ひに  
かくも少く知られる事は在來の史料の別種な然し價値に於て少し  
も達ばぬ古代生活の Survivals おそれたは民話或は民間行事等  
の形に於て健村の間で傳へられ、回憶する採集者の手を待つてお  
るとは幸い事である。

(松本信廣)

Lewis Spence; An Introduction to  
Mythology. London, 1921.

神話は古代民族及び原始民族の信仰、人生觀、及び世界觀の綜合  
であると言つてよい。これももて彼等は自己の起源から輝かれる  
語らんとする。それ故に他の古代民族の歴史も神話から始  
まるものもある。やがて多少の複雑な色彩をおぼれはじめる。  
従つて古代文化史研究にあつて神話の占むる地位は第一にきだ  
るものであらねばならぬ。しかるに多くの人々は神話研究を等閑  
にするが故に、皮實として解すべきかの如きの點を皮實となし、  
甚しきはすべての物語をそのまま事實みなとする。かかる傾向  
は、自國の神話、歴史の研究にあつて殊に著しくあり、素朴歴  
史家の常に陥りやすき危險である。この危険をさけるためには、  
より神話學の知識を必要とする。即ち神話の性質、起源、發展、  
種類等について的一般概念を得ねばならぬ。この要求に應ずる最  
近の好著として、スペンス氏の神話學概論を紹介した。

學問に定義を下さないのは、その學問の研究に基だ至便であり  
比較宗教學、民俗學が相接なる關係を有し、従つて往々混同され  
て、おつて行はれた信仰であつた原始的もしくは初代の宗教研究  
でおかしなし、政治學であつて、今なほ行はざる原始的宗教及  
び風習の研究となした。従つて神話學は宗教學の一部をなすので  
ある。けれども神話、及び神話學の見解は、從来人に亘る時代に  
よる體々異つて一定しない。ギリシアの Xenophanes (B.C. 540 -  
500) やアホロニスの多ヘーメの體調などは、Max  
Müller, Sir E. B. Tylor, William Robertson Smith, Andrew  
Lang, Sir James George Frazer 等其他幾派に亘るものが神話  
學者の見解と謂つて、著者は一々紹介批評をなしてゐる。今日  
のところは、神話學派の見解にもはや信じられないものもある。ま  
た人類學派の見解と雖もいづれとも是認することを得ない。この  
に神話が宗教的性質を有するや否や、また神話が儀式とは云われ  
が最初の起源なりや等の問題は、Lang & Smith による討論を  
されたるが如く、「サンバは宗教と神話が混雜して區別し、ベニスは  
神話が儀式を説明するために作られたものであるが、今  
しか著者は、神話がその性質において大部分宗教的であるのである。  
」この「まだ神話が神話の起源において儀式」先立つてあるが、たゞ  
副次的意味のものが儀式より由來したることを信ずるのである。  
しかし著者が從來の諸學者を批評するにあつて、いかが不

下したるヴァントの「」や學者を遠してゐるゝである。われらは神話研究にあたつて、ヴァントの見解のみに依らんとするのではない。けれども神話に對して彼の與へたる心理學的解明は、從來の諸説に比して、いちども特色を示し、特殊の價値を有するのであつて、從つて彼の神話學上における地位は、到底看過するを許されないものと信ずる。而してこれと關係して、本書全體に對しても、ヴァントの民族心理學ほど透徹したる解明を與へられない點に、或る不満をおぼえるのである。例へば神の進化において、靈魂觀念が基礎となつて物神、トーテム神、祖先神等が發生するとなすのであるが、その間の發展過程及び相互の關係などに關してもうと明確なる説明を要求したいのである。

以上の二点も不満を感じするものの、しかしその取扱へる材料の豊富なるところ、その研究法の比較的公平なることは、本書の特色である。著者が、神話研究にあたつて言語學派、人類學派、乃至太陽神話學派、植物神話學派等の一方のみに偏する、かなく、あらゆる合理的方法を用ひんこゝかわざつてゐる點は、なんとなれば言語學派は、おもつて神を言語學上より説明一得るとなし、太陽神話學派は、おもつて神を太陽神に關係せしめ、植物神話學派は、一切の神を植物に起源せしめんとする危険に陥るからである。材料の豊富なることは、著者が大英國王立人類學會の『』、"A Dictionary of Mythology," "A Dictionary of Non-Classical Mythology" 其他へキシ神話等の著ある

んかを思へば、首肯せざるゝだ。それがいかかせば、日本神話の黄泉の主宰神を Enma-O (三ノアヒのノルマ) ねらうが、これは佛教となし(われらはイザナミヘヨトシナキ)、人鬼に文明を教へたる神を Okikurumi など(これはアイヌの神でありて、日本神話においてはオカホタリムヘヨトビアルと信する)、また古事記原形の誦傳者を女官 a Court lady の Hyeda No Rae (綾田阿禮の読み方としては實になかしい) としてゐる。われは、われら日本人には最も意にみだらるものである。かかる點からみても、日本神話は日本人自身によつて研究されるべきことを思はしめる。しかるに我が國において、從來神話學として知られたる書は、高木敏雄氏の比較神話學あるのみである。泰西における斯學の發達は、最近において殊にいちどもしく、さかんに論議をたゞかにしてゐる。例へばギリシア神話の戀愛の美との神話学派、アーヴィングの Venus と同神には、Dr Rendel Harris によれば本来はアンドラケ草であつたと語り、これに續けて Professor Elliot Smith は、その原形は子安貝であつたと論駁してゐる。また或る論者に従へば Apollo は本來林檎であり、Bacchus は常春藤の小枝であつて、Zeus は燧石の物神であつたと語る。かかる最近の研究を基礎としてなれるスペンス氏の好著を思ふにつけても、この方面におけるわが學界の不振を悲まざるを得ない。

終りに本書の組織を示せば、第一章緒論、第二章神話學の發達第三章神の進化、第四章神の種類、第五章神話の分類、第六章宇宙開闢神話、第七章極樂と地獄、第八章民俗と神話、第九章儀式の神話、第十章神話の記録的資料、第十一章世界における大神話組織の本文三十五頁の大體である。(松本芳夫)